

ワイルド・タウン 英雄伝説

2005(平成17)年6月4日鑑賞(ホクテンザ2)

★★



監督＝ケヴィン・ブレイン／出演＝ザ・ロック／ジョン・ビーズリー／バーバラ・タルバック／ジョニー・ノックスヴィル／ニール・マクドノー／クリステン・ウィルソン／アシュレイ・スコット（日本ヘラルド映画配給／2003年アメリカ映画／80分）

第3章

DVDでもじっくり楽しみたい

……米軍特殊部隊を除隊して20数年ぶりに戻ってきた故郷は、今やカジノやアダルトショップ中心にその雰囲気が一変！ 今、この町を支配するのは、カジノを経営し、町の富と権力を一身に集めた幼なじみ。主人公は、単身この悪と立ち向かう筋肉隆々の肉体男。そしてその姿はまさに、古き良き時代のアメリカン・ヒーロー。単純な勧善懲悪モノの物語はわかりやすいものの、ちょっと時代錯誤のB級映画……？

🎬 主人公はなぜ故郷へ？

この映画の主人公クリス・ヴォーン（ザ・ロック）は元特殊部隊の精鋭。それを除隊して二十数年ぶりに戻ってきた故郷は、地名は明らかにされていないものの、北太平洋沿岸に近い山間の静かな町とのこと。

かつて製材業で栄えていたこの町で、クリスの父親はハミルトン製材工場に勤めていた。

そんな父親の跡を継ごうとせず特殊部隊に入隊したクリスが故郷へ帰ってきたのは、特殊部隊での過酷な日々に見切りをつけ、子供の頃から身にしみついている懐かしい木材の香りを思い出したから……？

町の外れに建っている静かな一軒家で、クリスは父親（ジョン・ビーズリー）、母親（バーバラ・タルバック）、そして今は救急隊員となっている妹ミシェル（クリステン・ウィルソン）と再会し、故郷で静かに暮そうとしたが……？

10年ひと昔

「10年ひと昔」とはよく言ったもの。浦島太郎が龍宮城から故郷へ帰ってきたのが何年後か知らないが、進歩や変化の早いアメリカでは、20年後といえば「ふた昔」も経っているのだから、町の様子や雰囲気（すなわち社会経済構造）が一変して当然。父親が働いていたハミルトン製材工場も今は閉鎖され、町の中心にはカジノやアダルトショップが建っていた。

こうなると人心も一変し、青少年がドラッグに手を染めているばかりか、保安官を頂点とした警察組織も何か怪しげ……？

今この町を支配しているのは、ハミルトン製材工場の跡取りだったジェイ・ハミルトン（ニール・マクドノー）。ジェイが開いたカジノ「ワイルド・チェリー」は、風俗とバクチで大当たりしているばかりか、彼は富だけではなく、表の権力も裏の権力も一手に握る実力者となっていた……。

幼なじみたちの再会は……？

クリスが故郷へ帰ってきたことを知った幼なじみのレイ（ジョニー・ノックスヴィル）たちは、クリスを歓迎。さっそく高校時代の友人たちと昔ながらのフットボールの試合としゃれこんだ。その相手チームはジェイの率いるチーム。ここまでは和気あいあいの2人だったが……？

カジノでは大騒動が……

試合終了後、ジェイはクリスやレイたちを「ワイルド・チェリー」にVIP待遇で招待し、クリスたちは喜んでこれに応じた。しかしそこで大騒動が発生することに……。クリスがそこで見たのは、明らかなかさまバクチ！ 今日「ご招待」なのだから、とりあえず楽しみ、その後でジェイと掛け合えばいいものを、単細胞（？）のクリスはいきなり大爆発……。

こりゃ、いくら特殊部隊あがりでも、ちょっと大人げないのではと思ったのは私だけではないはず……。そしてまた、いくら特殊部隊あがりでケンカが強くて、カジノの用心棒の数は多い。クリスは取り押さえられた挙げ句、瀕死の重傷

を……？

何とも不幸な幼なじみたちの再会だが、ストーリー構成のためには早くケンカをさせるのが1番……？

こんな陪審裁判はインチキ……？

ここまでくるとクリスとジェイとの対立は決定的！ もはや昔の親友などという甘い話は通用しない。カジノで大暴れしたクリスは当然傷害罪や業務妨害罪などで起訴され裁判となったが、クリスの弁護人は有罪を認めて司法取引をすべきだとアドバイスした。これを拒否したクリスだったが、法廷の状況は圧倒的に不利。これに業を煮やしたクリスは突然その弁護人に対して「お前はクビだ」と宣言し、自ら陪審員に対して最終弁論を……。そんな無茶な……？

その弁論も、シャツを広げて、カジノの中で負わされた胸に深く刻まれた傷を見せてアピールし、さらにこの容疑が晴れたら保安官選挙に立候補して、昔の静かな町を取り戻す、と宣言するもの。こんな最終弁論で「無罪」になるのは、B級映画なればこそこの話……？ こりゃいくら何でも無茶苦茶……？

紅一点の同級生は……？

カジノはバクチばかりではなく、オンナもOK……？ クリスは、「まずはそこから」とばかり個室に入ると、そこでは何やら怪しげな個人ショー（？）が……？ ところがその「美人」が途中で「あなたはクリス……？」と聞いてきたからびっくり。そして、クリスも「君はデニ？」と……？ 何と昔の同級生のデニ（アシュレイ・スコット）が正業（？）からあぶれ、今はジェイが経営する「ワイルド・チェリー」で風俗のバイト（？）をしているというワケだ。こりゃ、あまり良くない現象。この紅一点のデニは、クリスが町の刷新に乗り出して、保安官選挙に立候補し、具体的に「力による構造改革」（？）を実行しはじめると、勇気を出してこれを応援するコトに。

そして、たった1人で警察署を守るクリスを訪れたデニは、観客の予想どおり、いとも簡単に（？）クリスと結ばれたが……？

アメリカの保安官や大統領は？

保安官は選挙によって選ばれるもの。また、民主主義の国アメリカではそれは当然のこと。そして大統領と同じく、選挙によって選ばれたトップである保安官や大統領には絶大な権限が与えられるが、その権限の1つが人事権。議院内閣制をとる日本では、行政の長たる総理大臣が変わっても、官僚組織は何も変わらないのが通例。

したがって、日本では逆に、つい先日の5月17日に小泉総理が郵政民営化法案を通すため(?)に「事務次官級の松井浩総務審議官」と「清水英雄郵政行政局長」の首を切ったことが大問題とされることになってしまう羽目に……。

ところが2大政党制と大統領制のアメリカでは、大統領が変われば、閣僚はもとよりすべての行政組織の人事がガラリと変わるのがむしろ常識。考えてみれば、トップが変われば政策が変わるのだから、その政策を遂行すべきスタッフが変わるのは当然のこと。

日本では多くの官僚たちが「政治家なんて、大臣なんて、総理大臣なんて、誰がやっても同じこと。国の政策はオレたちが遂行しているのだから……」と思っているとしたら、それは大問題！

クリス保安官の誕生！

話が大きくなったが、映画では一瞬にしてクリス保安官の誕生だ……？ このようなそして民主主義の基本ルールがはっきりしているアメリカでは、保安官が変われば当然警察署のスタッフも総入れかえ！ それまで悪事の限りを働いてきた保安官が選挙で敗れた結果、それを支えてきたスタッフたちに対してクリスは、「君たちは全員クビだ」と一言でバッサリと！

しかし他方、クリスも人の子。1人では町の「構造改革」はムリ。そこで応援を求めたのは親友のレイ。ムシヨ体験もあるレイだったが、今は真面目に働いており、「人生意気に感ず！」とばかり、クリスの申し出を受けて保安官補になったが、その前途は大変。

その果たすべき役割は小泉改革における竹中平蔵金融財政担当大臣みたいなも

の。あるいは、少し前の道路公団民営化問題における、石原伸晃国土交通大臣みたいなもの……。

「サンドバック」の役割を果たすべく、レイはクリスとともに行動に乗り出したが……？

この映画はあくまで肉体派！

腐敗した町の構造改革は本来難しいものだが、この映画ではそれは簡単。なぜなら、要は力で腐敗を一掃するだけの映画だから。弁護士の私の目からみればもちろん、一般的な国民の視線からみても、保安官になった後のクリスのジェイに対する挑発や、ドラッグ摘発のための捜査活動(?)は無茶苦茶で、それ自体が違法であることは明らか。

まずクリスとレイはドラッグ売買の関係者を逮捕し、その自白を引き出すべく徹底的に「家宅捜索」……？そしてこの男を拘留したが、ジェイたちの仕返しはミエミエ……。さあ、いよいよ決戦の火ぶたが……。

決戦終了とともに映画も終了……

決戦は2つの戦場(?)で。1つはクリスが寝泊まりしている警察署に対するマシンガン乱射による徹底的な襲撃。もっとも、それも間のいいことに(?)、デニと一夜を過ごした翌朝の朝食直前の襲撃だ。もう1つは保安官補のレイが守っているクリスの家族が住む自宅への襲撃。

この2つとも、クリスは元特殊部隊あがりらしく、超人的なパワーで反撃！そして遂にクリスとジェイとの2人の決戦が……。

その勝敗の行方は映画のストーリーとしては明確だが、呆気ないのは、その決戦が終わるやいなや映画もジ・エンドとなること。アレレ、こりゃ何だ……？80分はちょっと短かすぎないか？

これではいくらB級映画でも、あまりに呆気なさすぎるのでは……？

2005(平成17)年6月7日記